生存のための表現

山崎正和

生存のための表現

山崎正和

構想社

生存のための表現

一九七七年四月一六日　第一刷発行

定価一〇〇〇円

著者　山崎正和

発行者　坂本一亀

発行所　株式会社　構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六
〒一〇一　電話（〇三）二五四ノ六六〇七
振替口座（東京）一ノ五九七一

印刷所　新陽印刷

製本所　小泉製本

© M. Yamazaki 1977

0095-00007-2463

〈初出一覧〉

一　私生活者のための歴史　昭和46年11月「歴史と人物」

二　共生のための表現　昭和48年4月10日「朝日ゼミナール」講演・朝日新聞社『日本人の美意識』収録

三　中世の芸能と都会性　昭和51年8月20日「朝日ゼミナール」講演

四　日本的表現の環境　昭和48年4月17日「朝日ゼミナール」講演・朝日新聞社『日本人の美意識』収録

五　不機嫌の中からの表現　昭和49年5月22・29日「朝日ゼミナール」講演・朝日新聞社『近代の文学』収録

目次

一　私生活者のための歴史
——太平記の救済　5
二　共生のための表現
——幽玄のアイロニー　33
三　中世の芸能と都会性
——徒然草の世界　68
四　日本的表現の環境
——盆地と私生活　110
五　不機嫌の中からの表現
——森鷗外の時代　145
あとがき　219

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生存のための表現

一　私生活者のための歴史

——太平記の救済

一

一九七〇年の春、全国の大学がまだ学園紛争の余燼のなかにあったころ、私はたまたま『平家物語』に素材を得て、平清盛と後白河法皇を主人公とする芝居を書きあげた。その公演に駆けつけてくれた友人のなかには、たまたま大学に職を奉じるひとたちも少なくなかったのだが、幕間の劇場廊下で雑談をかわしてみて、私は彼らがあまりにも一致して共通の反応を示すことに、ある感慨を禁じ得なかった。疲れと無力感が顔に色濃く残っている大学教師たちが、まるで子供のように楽しげに、紛争中の自分と同僚を劇中のあれこれの人物になぞらえて興じているのであった。

芝居の筋は必ずしも彼らを勇気づけるような物語ではなかったし、まして劇中人物の思想や行動が、現代の混迷になんらかの実際的な智恵をあたえるようなものであったわけではない。『平家物語』と当面の大学の世界のあいだには、さしあたり一種の崩壊感のほかに共通のものはなかった。

彼らはただ舞台に移り行く乱世のありさまを眺めながら、そのなかで、現に自分が演じているのとあまりに酷似した役柄が演じられているのを見て、楽しんでいたのである。八百年という歳月を隔てながら、人間は切迫した状況に遭遇するとふしぎに同じような役柄の配置をつくり出す。そして、その役柄のひとつをふりあてられたが最後、人間は避けがたく類似の行動の「型」を演じるものだということを、彼らはあらためて確認して救われた気分を味わっているようであった。

いうまでもなく、この友人たちは「歴史は繰返す」というような安易な結論に救われる楽天家ではない。歴史に先例があるからといって、それによって彼らの生き方になんらかの見通しが生まれたり、あるいは自分の行動が社会的に正当化されるなどと信じて安心するひとたちではない。にもかかわらず、彼らがこのアナロジーの発見によって深く心をなごませていたのは明らかであって、それは表現が無邪気であっただけに、私には率直に心をうつものがあった。そしてこの単純このうえない経験は、それ以来、私に歴史の意味について今さらのように考えさせるきっかけとなった。おそらく日本の知識人にとって、あの大学紛争はまれに見る私的で肉体的な脅威であったためであろう。私は、歴史というものが身近でこれほどなまなましく、ほとんど「実用的」に読まれている光景を久しく見たことがなかったのである。

それから半年ばかりたって、私は奨められる機会があって、今度は『太平記』を現代語に翻訳する仕事にとりかかった。この、文字通り「乱世の記録」をあらためて読み進むにしたがって、私は

奇妙な暗合に気づいて、しだいに予期せぬ興奮にとらえられて行った。なぜなら、ほかならぬこの『太平記』こそ、混迷の底にあって歴史のなかにアナロジーを求めるひとびとの、驚くべき群像図にほかならなかったからである。

『平家物語』も不安な人間のドラマであったが、『太平記』はそれにもまして、もう一段深い不安におののく人間のドラマだといえる。『平家物語』が、いわば栄華の頂点からひと筋に崩れ落ちる一門の悲歌であるのにたいして、『太平記』は、野望に燃える人間がいったんは成功の坂道を登りつめ、そのうえで運命の急斜面をふたたびなだれ落ちて行く物語だからである。主人公というべき後醍醐帝の登場から北条政権の打倒までが十一巻、さらに建武中興の夢が破れて天皇の崩御までが九巻余り。後醍醐帝そのひとはもとより、それに随うひとびとは、護良親王も楠正成も新田義貞もことごとく同じ悲運に見舞われる。のみならず、彼らを追い落した足利直義や高師直兄弟すら、繁栄のあとにきびすを接した没落の運命にあうことになる。物語を読むわれわれはまず、危うい石を積みあげる不安をしたたかに味わったうえで、もう一度それが目のまえで崩れ落ちる恐怖につきあわなければならないのである。

一方、『太平記』がおびただしい古典の引用に満ち、和漢の歴史書や物語の多彩なエピソードに飾られていることは、広く知られた特色であろう。『平家物語』もまたしばしば叙述のなかばで古典の一節に言及するが、これは多くの場合、たんにものの譬えか言葉のあやにとどまっているよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に見える。ところが『太平記』においてはときに一章の大部分が、たとえば越王勾践と呉王夫差の伝説に割かれていたりするのである。一見したところ、それはこの作者のペダンチズムの現われにも見え、物語の筋だけを追おうとする者にはむしろうるさく感じられる。私も翻訳の当初はそのあまりの執拗さに辟易して、何回かそのうちの若干を削除することを考えた。けれども、やがてこの物語に底流するあの恐るべき不安と重ねあわせて読みなおしたとき、私にはこの古典引用が、けっして作者の遊びや衒学趣味にとどまらないという確信が生まれたのである。

第一に、遊びというにはこれはあまりに執拗の度がすぎるし、しかも引用が現われるのは、物語が悲歎や緊張の頂点にさしかかったときに集中している。『太平記』が本来「語りもの」であったということを考えればなおさらのこと、たとえそうでなくても、こうした廻り道が物語の緊張を弱めがちだということは常識であろう。明らかに作者の意図は文章を飾ろうとしているのではなく、もし飾ろうとしているなら、作中人物そのものの行動を荘厳化しようとしているのである。そのうえ、第二に注目すべきはその作中に描かれた人物自身が、多かれ少なかれ、自分の行為について歴史的な先例を意識しているということであろう。落魄の悲歎のなかで、あるいは陰謀の緊張のなかで、彼らは必ずしも歴史的な先例を、自分の行為の現実的な指針として思い浮かべているのではない。ほとんどの場合、彼らはただ同じ境遇にあった先人の苦しい心境を思いやるだけなのだが、いったいこういう心の動きをわれわれはどう理解すればよいのであろう。一読して、彼らのそういう

心理はわれわれにも不自然でなく描かれているのだが、いったい死地に赴く人間が、漫然たる気どりやペダンチズムを楽しんだりするものであろうか。

「落花の雪に蹈迷ふ、片野の春の桜がり、紅葉の錦を衣て帰、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅宿となれば懶に、恩愛の契り浅からぬ、我故郷の妻子をば、行末も知ず思置、年久も住馴し、九重の帝都をば、今を限と顧て、思はぬ旅に出玉ふ、心の中ぞ哀なる。」

人口に膾炙したこの道行文で知られる俊基朝臣の東下りは、『太平記』をひもとくといち早く、第二巻のなかほどに現われて来る。後醍醐帝の倒幕の陰謀が二度までも露見して、ついに参謀をつとめた日野俊基が斬罪のために鎌倉へ送られる物語である。このあと、道行文は東海道の地名を詠みこんでながながと続くのだが、これがじつは、『平家物語』にある平重衡の「海道下」の道行を下敷にしていることはよく知られている。

「駒も轟と蹈鳴す、勢多の長橋打渡り、行向人に近江路や、世をうねの野に鳴鶴も、子を思かと哀也。」

というような一節は、いうまでもなく、

「勢田の唐橋駒もとゝろにふみならし、ひばりあがれる野路のさと、志賀の浦浪春かけて、霞にくもる鏡山。」

といった原典を思い起させるに十分であろう。もちろん、道行文そのものを当時の聴衆が文章の技巧としてまったく楽しまなかったとは考えられず、『平家物語』についても相当の知識のあった民衆たちが、こうしたつかず離れずのもじりにやんやの喝采を送ったであろうことは、想像に難くない。しかし、このように地名を片はしから並べたて、それに古歌や伝承の思い出をからませて行く「道行」という形式それ自体、仔細に考えれば、じつは単純な知的遊戯としてすまされない性質を持っているように思われる。けだし土地に名前をつけるということは、人間が自然を文化に組みいれる最初の手続きであろうが、日本人はさらにそれを深めて、自分の国土にたえず詩的な命名を繰返して来たと見ることができるからである。地名を歌うとは土地を人間の手によって暖めるということであり、それを思い出すのは、その土地を二度と文化的な荒野にもどすまいとする努力だといえる。したがって道行文のなかの旅人は、いわば人間によって祝われた自然のなかを歩いているのであって、そのことによって、すでに流離の孤独から最初の一歩において救われているといえる

であろう。

しかもこの場合、俊基卿の道行はそれ以上の意味を持っているのであって、彼の経験する苦難は、すでに平重衡という具体的な先行者によって「命名」された苦難であった。重衡は悪名高い南都焼打ちの責めを問われ、鎌倉で裁きを受けるために罪人として引きたてられて行った。彼の現実の旅が実際にどのようなものであったかはともかくとして、すでにこの旅は『平家物語』によって伝説化され、いいかえれば万人の目によって演劇化された旅であった。重衡自身、さらに彼の先行者というべき西行や業平の旅をしのびながら、しかるべき舞台で風の音に耳を傾け、しかるべき舞台で涙に袖をしぼり、いわば「型の如く」に落魄の旅を演じている。そこには、苦悩の心理の骨組だけが筆太に描かれていて、千々に乱れる現実心理の、「型」にならない末梢は切り捨てられている。こういう旅を身をもって跡づけながら、俊基もまた自分の体験を簡明化して行くのであって、要するに彼は重衡の先例から、いつ、どこで、どのようなかたちで悲歎に暮れればよいかを学びとっていたといえる。すなわち、天竜川のほとりにたどりつけば、彼はそこでかつて重衡が女とかわした歌を思い出し、小夜の中山を越えようとすれば、昔そこでまさに重衡がしのんだように西行法師の故事をしのぶのである。

そうすることによって俊基が辛くも避けられたものは、やりきれない現実心理の瑣末な乱れとの戦いであったにちがいない。人間はたとえば「望郷」といった明瞭な感情によっても苦しむが、精

神が真にむしばまれてとり乱すのは、むしろそれにともなう無数の、小さな、「型」にならない感情によってであろう。これはむしろ「気分」と呼ぶべきものであって、近代小説が熱心に捉えようと努めている対象であるが、にもかかわらず、この種の感情の特色は、どこまで行っても十分な「命名」が不可能だということにある。そして繰返していえば、人間の精神は命名し得る明確な苦痛には耐えられるが、名づけようのないアモルフな不安や焦燥のまえには容易に腐食させられるものである。故郷を追われ刑場に向かう俊基の心境も、その苦痛があまりにも巨大であるだけに、かえって直接にはとりとめのない瑣末な心の乱れに満たされていたと考えられる。それは言葉によって満足に表現できないのみならず、むしろ人間がそれにたいして、どのような表情と、どのような姿勢をもって対処すればよいのかわからないような感情である。当然そのなかに放置されていれば、俊基はやがて動物的な吠え声をあげるか、そうでなければ、完全な無表情を浮かべて放心しているほかに道はなかったにちがいない。

そうした動物的な狂乱や放心から俊基を救い出し、彼をぎりぎりのところで人間的な表現者として支えたものが、重衡の遠い先例だったといえる。それは近代小説の目ではなく、中世の叙事詩の目によって捉えられていただけに、ひときわ明確で簡潔な輪郭を持っていた。俊基はそれを思い出し、そのうえに承久の藤原光親（あるいは宗行）の先例をも思い出すことによって、はじめて自分の感情を自他ともに理解可能な「悲哀」として定着させることができたのである。

昔南陽県の菊水、下流を汲んで齢を延ぶ。
今東海道の菊河、西岸に宿つて命を終ふ。

遠江の菊川の宿に着いた俊基は、かつてそこで殺された藤原宗行の漢詩を思い出し、みずからも宿の柱に一首の歌を書き残す。

古もかゝるためしを菊川の同じ流に身をや沈めん

歌われている感情はともに陳腐であるが、このときの俊基にとって、自分の感情をおよそ内面的に把握することなどどうでもよかったにちがいない。いったい、これから死にに行く人間の心境を、たとえそれが自分のものであろうと、内面的に捉えるなどということができるものであろうか。俊基はそのとき、明確な外面だけを見せている先人を模倣しているのだが、とにかくその先人は、そういう外面の姿を見せて彼には想像もつかない死の扉をくぐって行ったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com